現　地　通　信

バ　ン　コ　ク　通　信

本　岡　　武

1

わたくしは，去る10月１日京都を出発，ホンコンに１泊して，翌２日，８カ月ぶりにドン・ムアン空港についた。それから，ちょうど，まる３カ月，この間の，バンコク連絡事務所を中心としての活動を通信しよう。

2

わずか８カ月留守しただけなのに，バンコクの発展ぶりは，まことにすばらしい。空港から市内までの，４車線のハイウェーは完成し，空港がよいがとても便利になったのはありがたい。東北タイだけでなく，中部タイの道路もまったくみちがえるように改善されている。めざましい経済成長ぶりだ。事実，1965年の国民総生産は８％の伸びが予想され，経済開発６カ年計画の目標年率６％を，はるかに上まわっている。これには，世界的な好況，外国の援助と投資の増大，ベトナム戦争の影響などもあげられよう。

ベトナム戦争の影響で目立つのは，バンコクでホテルが続々と建てられていることや，これまであり余っていた外人用借家が払底していることだ。駐ベトナム・ロッジ米大使の夫人さえバンコクに住んでいるといわれるほどだから，あとは追って知るべしだ。バンコクの南のサタヒップ（Sattahip）の米軍港湾・空港の建設も去る12月に New York Times がすっぱぬいたが，サタヒップからコンケンにかけての，いわゆるバンコク・バイパスも米軍によって建設中だ。ドン・ムアン空港で見る米軍機や軍人の数もずっとふえている。

タノム首相，プラパー副首相らが，東北タイへの共産分子の侵入について，これまでも国民に警告を発してきたが，このごろはそれが一段と激しくなってきた。マクナマラ国防長官が12月の NATO 会議で，中国の次の目標はタイだとの発言も，新聞では大きく刺激的にとりあつかわれている。

いわば，未曽有の繁栄のうちに，じりじりとラオス・ベトナムの状勢がタイに影響してきているようだ。しかし，国民一般は，この国際状勢の動きにむしろ無関心，今日の生活に満足しているといった感じをうける。こうして，1965年も終ろうとする。

3

この10月から12月に至る期間，東南アジア研究センターの関係者のバンコクの往来は，なかなか活潑だった。

わたくしが到着したときには，バンコクで研究に従事していたのは，カセツァート大学構内のタイ米穀局研究室を根拠とし，全国に圃場をもって植物栄養学の実験をすすめている福井捷朗大学院学生（農）と，チュラロンコーン大学留学中の言語学の桂満希郎大学院学生（文）の２人だけ。べつに，チエンマイ南方のサンパトーン稲作試験場に渡部忠世京都府大助教授(農)が，７月いらい，モチ米の研究をつづけていた。福井君は現在もひきつづき研究中，桂君は外務省寄贈のタマサート大学日本学講座の講師となり，10月なかばで留学生生活をうちきり，いったん帰国，11月上旬にバンコクに赴任してきた。われわれとしては，桂君をチャンネルとして，タマサート大学とより接触を深めることのできるのを嬉しく思う。渡部助教授は半カ年間の現地の米作試験場での研究を予定どおり終了，うんとデータをもって，12月おわりに帰国した。

わたくしと同じ便で，赤井重恭教授（農）が，バンコクに到着。教授に私淑しているタイ米穀局 Adul 技師の案内で国内の稲作病害状況を視察され，そのあとマラヤ・シンガポール・カンボジア・ホンコン・台湾を経て11月はじめ帰国した。

11月に入って，飯島茂助手（東南ア研），水野浩一・矢野暢研修員（同）がつぎつぎと，バンコクに到着，ここですっかり準備をととのえたうえ，飯島助手はおくれて到着した夫人とともに，北部のメーサリエ

ンへ，水野研修員は東北部コンケーン近くのかれの調査村へ，また矢野暢研修員は南部ソンクラ近くのかれの親しんできた村へ，もどっていった。3人とも，異口同音に，「昨年，はじめて村へ入ろうとしたときには，はたしてどうなるやら不安だったが，こんどは，何もかもわかっているので気丈夫だ」といっていたが，まさにそうだと思われる。何の不安もなく親しい人々の間に入りこんでこそ，はじめて十分な調査研究ができるのだ。わたくしは，こうして村に長期的にくりかえし入って定着する調査研究方法は大成功だと思う。

飯島助手は奥さん同伴だが，こうして奥さんといっしょに村に住みこむことは，わが国ではあまり例のないこと。これは定着調査のさらに一歩前進だ。わたくしは飯島夫人がほんとうにけなげだと思う。

11月には，空路と海路とにわかれて，植物班の田川基二助教授・岩槻邦男助手・福岡誠行大学院学生(理)と北川尚史講師（奈良学芸大）の一行がタイのシダ植物相の調査研究のため到着，森林局 Tem Smitinand 植物標本室長の積極的な援助をえて，森林局員の案内のもと，下旬東北タイに向ってバンコクを出発した。12月は，チエンマイを中心に北部タイで採集・調査を続行中である。この調査については，森林局の援助に深く謝意を表しなければならないと思う。

また11月には森口兼二助教授（教育）が到着，現在，タイ文部省 Charoon Vongsuyanha 教育技術局長の懇切な配慮のもとに，バンコクを中心に，タイ教育事情を研究中である。教育班として，ほかに，12月に栗本一男助手(教育)が10日間ばかり，バンコクに滞在，同じく Charoon 局長の好意によって資料収集をおえ，帰国した。

12月には藤吉慈海助手（人文）が，昨年にひきつづいて，仏教の調査研究のため到着，その間ビエンチャンにとんで，ラオスの仏教の実態を調査し，年末，ペナンに発った。

また12月はじめ，川口桂三郎教授と久馬一剛助手（農）はセイロンへの土壌調査の途次バンコクにたちよった。

現在，現地調査にあるものは，上記のスタッフ以外は，マラヤ・ジョホール州エンダウの，前モスリム・マレー人部落に定着している前田成文大学院学生(文)だけだが，同君はひじょうなプリミチブな生活条件のもとで，きわめて元気にすごしているようだ。

この3カ月だけでなく，昭和40年をつうじて，東南アジア研究計画として，なんの事故もなく，フィールド・ワークが予定どおり遂行できたことを，ひじょうに嬉しく思う。

4

バンコク・オフィスは，多数の来客を迎える。10月末から11月はじめにかけて，文部省大学学術局吉里邦夫大学課長が訪問され，東南アジア研究センターの現地での活動状況を，つぶさに視察された。

また，11月下旬，バンコクでのアジア文相会議に出席された中村梅吉文部大臣は，多忙な正味3日間のバンコク滞在のスケジュールを，わざわざさかれ，当オフィスを訪問されたことは感謝にたえない。現職文部大臣の海外出張はこれがはじめてのことだそうだが，若い研究者と文字どおり膝をまじえて話しあわれたことは，大臣として珍しいことではなかろうか。

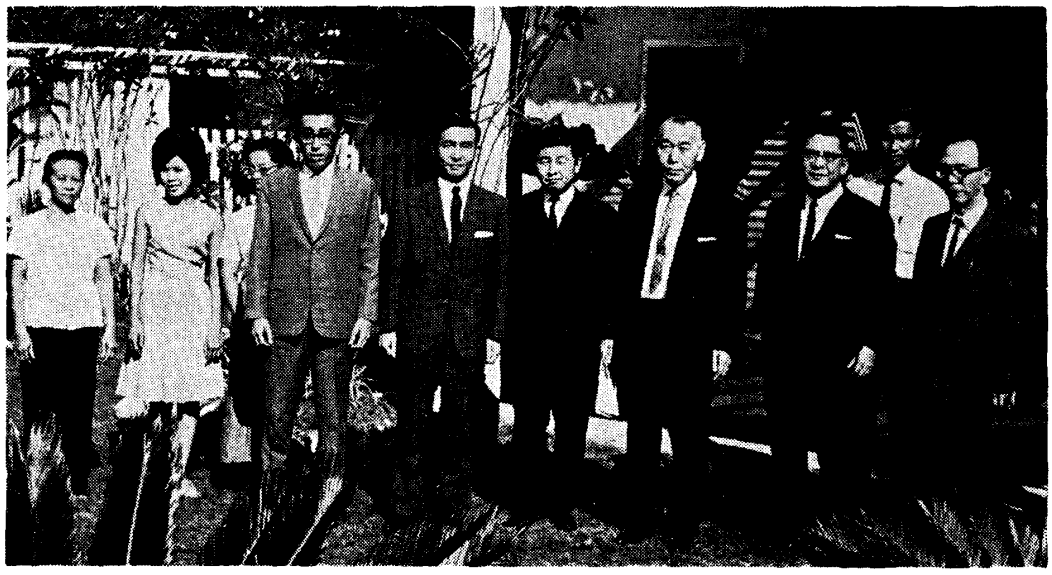
大臣とともに会議に出席された文部省調査局西田亀久夫審議官，同奥田真丈調査課長はそれぞれ別々にオフィスを訪問，バンコクに居合わせた，われわれスタッフと話しあわれた。また，同会議にアメリカ傍聴団団長として参加された在東京 Charles B. Fahs 米公使（文化担当）も，オフィスにこられた。

オフィスには，来訪客が多いが，われわれの現地研究の実情を知ってもらうために大歓迎だ。また，タイへこられた方，あるいはタイに住んでおられる方に，少しでも，われわれの研究が役にたつことがあれば，ひじょうに幸せだと思う。

5

バンコク連絡事務所の仕事で，なかなか厄介なのは，調査研究のためにタイ国家研究会議（National Research Council）から許可をとることである。このバンコク通信のなかで，この手続きについて書きとどめ，その周知徹底をはかっておきたい。

1964年9月のタイ国閣議で，外国人がタイ国内で調査研究する場合には，国家研究会議の許可を必要とすることとなった。その手続きは，(1)所属機関長と在タイ日本国大使館の証明書をそえて，正式の書式で申請書を提出する。(2)その申請書にもとづいて，国家研究会議が審議のうえ許可するということになる。



写　真　中村文相バンコク連絡事務所訪問（昭和40年10月23日）。向って左よりトム（コック），パンサ（秘書），エル（女中），桂満希郎講師（タマサート大学），矢野暢研修員（法），飯島茂助手（東南ア研），中村梅吉文部大臣，本岡教授（東南ア研），ソムウォン（運転手），森口兼二助教授（教育）

ところが願書は，京都大学→外務省→在タイ日本国大使館→国家研究会議というコースをとり，研究者が所属部局に提出して，国家研究会議にとどくまでに，少なくとも1カ月，ときには1カ月半かかる。つぎに国家研究会議が申請者の研究分野に関係ある政府機関（たとえば仏教研究の場合は文部省宗務局）に，「申請者の研究を援助するかどうか」との照会を発した場合には，この機関からの回答に，少なくとも1カ月，ときには2カ月かかる。そのうえで，月2回の国家研究会議の常任委員会にかかるわけである。

だから，わたくしは研究者の研究予定期日に許可が間にあうように，ときには，国家研究会議，関係政府機関の間を走りまわらざるを得なかった。これからは，第1にできるだけ早く申請書を提出すること（少なくとも2カ月以前），第2に，もし関係政府機関内に研究申請者の知った官吏があるときには，その旨を申請書のなかに明記し，さらにその官吏に予じめ推進かたを依頼しておくことがいいのではないかと思われる。

いったん許可があったうえは，身分証明書を発行してもらえるし，滞在許可につき移民局に対しての推薦状を発行してもらえるから，国家研究会議の許可は研究調査にあたり，ひじょうに有効である。ただし，2週間程度以内の滞在，しかも，活動をバンコク市内にかぎるときには許可の必要はないようである。（ただし，この点は「閣議決定」ではなんら明らかにされていない。）なお，許可がおりた以上は，かならず報告書を提出することが規定されている。

6

わたくしは，この期間に，3つの会議に，それぞれ招請されて，出席した。11月1～3日のチュラロンコン大学政治学部主催の Seminar on Asian Studies, 11月6～7日のマレーシア図書館協会主催の Conference on the Acquisition of Malaysian Materials および11月29日～12月4日の国際自然および自然資源保護連合主催の Conference on Conservation of Nature and Natural Resources in Tropical South East Asia. このうち，マレーシア資料収集会議については本誌3巻3号上で，また自然保護会議については本誌次号で報告する。

ここでは，簡単にアジア研究セミナーについてふれておきたい。

かねてから，タイにおいても，アジア諸国の研究の必要なことが大学関係者に唱えられていた。これを本格的にとりあげようとしているのが，チュラロンコーン大学政治学部である。そのため，「アジア研究セミナー」が，同学部国際問題および外交学科主催で，同学部会議室に開かれた。参加者にタイの諸大学教官，

在バンコクの外国人研究者および各国大使館文化担当官とからなりたっていた。

このセミナーは，去る9月京大東南アジア研究センターが京都に招待し講義をしていただいた Kasem Udyanin 学部長の司会のもとにすすめられた。

第1日は，同学部の客員教授の Mote 博士と Talbott 博士の報告を中心として，"Asian Studies: Nature and Concept" についての討論。第2日は，Neon Snitwongse, Kusuma Snitwonge および Somsakdi Xuto 諸博士の報告をめぐって，"Asian Studies in Thailand" の現状分析。第3日は，Kasem 学部長を中心に，"Problems and Prospects of Implementing Asian Studies in Thailand" が検討された。

このセミナーの実際のねらいどころは，チュラロンコーン大学に，中心テーマを現代中国の研究におく「アジア研究所」を設立しようとすることにある。東南アジア，とくにタイにとって，現代中国の研究がきわめて重要であることは，いうまでもなかろう。このセミナーの成果が，具体的にどういう形で生かされてゆくかは，まことに興味深く期待されるところだ。

7

わたくしは，10月23日から28日まで，カンボジアをジープで一巡した。アンコールの見学，プノンペンの訪問，およびバッタンバン近くの De Tuol Sumrong にある日本・カンボジア友好農業センター（Centre Technique Agricole）の視察が，その目的であった。農業センターについては，わたくし自身の専門分野について，教えられるところが，ひじょうに多かった。しかし，この短期日の旅行で，なによりも印象づけられたのは，経済発展についてのタイとカンボジアとの格差，また国際関係における両国のそれぞれのあり方の相違である。

この旅行で，とくにわたくしが注意を払ったのは，京大東南アジア研究第2期5カ年計画（1968年4月～1973年3月）に，カンボジアをいかにとりあげるかについてである。この問題について，去る8月下旬カンボジアを訪問された猪木正道教授が，9月末のセンター研究例会席上で報告されたし（東南アジア研究3巻3号参照），また1月中旬，岩村忍所長が，とくにそのために，カンボジアに赴かれる予定になっている。わたくしは，この国にまだ手がつけられていない研究問題が山積しているし，また研究の必要を痛感する。しかし，シアヌーク殿下独裁下のこの国で研究をすすめてゆくには，1964年秋の大阪市大調査隊の例があるように，よほど十分に手配を予めしておかなければならない。もちろん，ビルマのように，現地調査が絶対不可能だというのではないが，タイやマレーシアのようなつもりで現地調査を計画してはいけない。

マレーシア文献会議出席のため，1年ぶりに，クアラ・ルンプールに滞在した。クアラ・ルンプールの発展は，バンコクにおとらず実に，めざましい。新空港，国立モスクなどの規模雄大な国立の建築物は，マレーシアの Nation Building の意慾と，これを実際に可能にしている経済力とを，十分に物語る。われわれの第2期5カ年調査研究計画は，この国においてもより一層進められるべきである。とくに，マラヤだけでなく，サバ，サラワクもとりあげられるべきだと思われた。

K. L. 滞在中，在マレーシア甲斐文比古大使から親切なもてなしをうけた。大使が，大使室の机上に『東南アジア研究』をおいておられ，それに掲載されている口羽益生助教授（竜谷大学），坪内良博研修員(文)，前田成文大学院学生（文）の論文（マラヤ北西部の稲作農村）を激賞されたが，この調査のリーダー故棚瀬襄爾先生の霊に報告して喜んでもらいたいと思う。

8

最後に，わたくし自身の研究の経過をごく簡単に報告しておきたい。最初の2カ月は，かねてから進めていた「タイの経済発展と農業」との総論的研究の仕上げに費した。これについては，とくに，総理府経済開発計画庁および統計局，農務省等の中央官庁の好意にまつところが多い。これにつづいて，12月に入って，タイ農業開発の基本的な問題のひとつである土地条件の整備，とくに灌漑排水計画の末端村落段階での整備をとりあげ，中部平原のチャイナート，シンブリ，スパンブリ地区をケースとして，調査をすすめている。大規模な灌漑排水計画が末端においていかなる状態にあるかは，去る9月の，「東南アジアにおける水資源利用にかんするシンポジウム」でも指摘されたところだ。とくに，タイの場合，土地協同組合の活動とむすびつく。こうしたフィールド・ワークを進めてゆくことによって，現実から教えられるところは実に多い。ただ，いろいろな仕事に追われて，時間の乏しいことを嘆ずるのみだ。（1965年12月31日，バンコクにて）

エンダウ川流域の Orang Hulu (Jakun) の家族覚え書

前田成文

1

Orang Hulu（オランフル）という呼称は彼ら自身が自分達をさして呼ぶ名前で，その意味は，「川の上流あるいは奥地に住む民」ということである。生活の舞台となるのは，川と背後のジャングルとであり，時たまマレー人・中国人の町に出て行くこともある。エンダウ川は，巾広く，黄色味を帯びて蛇のように流れ，沢山の支流をもっている。豊富とは言えないが淡水魚，亀などをとることができる。そのうえ，川が重要な意味をもつのは，唯一の交通手段としてである。

背後のジャングルの彼らが居住し活動する地域は，原住民区域あるいは，原住民保存地区としてスルタンから与えられたものである。この区域に関しては，マレー人保存地区ではあり得ず，野生動植物の保護法も適用されず，売買，譲渡，貸付も自由にはできない。(v. *The Aboriginal Peoples Ordinance*, 1954. Sec. 6 & 7.) この与えられた土地を中心に彼らは伝統的な生活なり，近代文明に犯されて designated された生活なりを自由に送ることができるわけである。

経済活動は単に採集栽培のみにとどまらず，それらを売ったり，あるいは賃金労働者となって現金収入を得る。この点，エンダウ川流域の諸部落は，Padang Endau にあるエンダウの町の購買圏の中にあるともいえる。貨幣概念は彼らの中に相当浸透し，物をすべて貨幣によって計算するほどであるが，それはあくまでも消費面における貨幣使用のみであって，貨幣の生産的使用を彼らが理解しているとは思われない。

貨幣経済の浸透にもかかわらず，経済活動の中心となるのは夫婦である。彼らが賃金労働となっても，オランフルである限り，夫婦を構成しないものは一種のかたわ者のように見なされる。伝統的にジャングルでの生活が夫婦の協働ということを強制的に要求したからでもあろう。

2

夫婦 (laki, bini) は sekelamin と呼ばれ，同時に夫婦家族そのものを指示する。もちろん男が家族のことを "anak bini" と言っても良いわけであるが，マレー人の用いるヒンズー起源の "keluarga" は全然用いられない。kelamin という語は元来 pair という意味である。

laki, bini という以外の人間をカテゴリー化するのに以下のような語を用いる。

頼りになる労働力となり得ない年少者は，ngkénék と呼ばれ（ほぼ12才位まで），一人前になりかけの青年を dara と称す。ngkénék であることは，すべての社会的機会に計算にいれられないが，dara となると常に彼らの存在が考慮される。bujang というカテゴリーは，単身者，一人者を総じていう語であるが，暗に婚姻の可能性を持つ人間，悪くいえば社会に性的な害を及ぼし得る人間としてとらえられる。離婚によって配偶者のない女性は janda と呼ばれ，dara (betina) と違って社会的な規制を受けることが少ない。

結婚したものでもいろいろとわけられる。子供がみんな死んでしまったか，あるいは，子供の全然できない夫婦は mantai と呼ばれ，配偶者と子供とを失った者は balu である。この両語は，しかし，本人の呼びかけにも用いられ，時には名前が忘れられてこれらの語だけが通称として用いられることもある。ある女は，4回結婚して4回とも主人を失い子供がないので balu と通称される。

婚姻は daraにとって必然的なものであり，ngkénék の段階を終えると配偶者をさがすことになる。一つの部落は，いわば "kompol saudara"（＝gulongan saudara）といえるが，部落内婚も外婚もなく，配偶

者の選択が慣習的に強制されることもなく，きわめて自由である。しかし男の側から言えば，部落内に適当な相手がいればそれを選びたがる。それは，婚後の生活が一時的にしろ妻方の家で送られ，部落部落は若干にしろ生活事情が異なっているからである。しかし部落の構成が小は8家族から大は30家族という小規模さなので，実際には部落内婚は難しいと言える

部落内の場合は，仲間集団の一員として案外た易く異性に近づき得るが，部落外の場合は，部落内ほど近寄るのは容易でない。

しかしたいがいの婚姻は，親類筋にあたる者の場合が多い。ここでは第一イトコ同志間でも婚姻し得る。婚姻を禁止されるのは，異世代間およびきょうだい間である。前者の例はそれでもないわけではないが，後者は，死をもって罰せられるという。

配偶者の決定は親（ibu）が子供にこの者はどうかと問う場合と，子供の方が両親にこの者と結婚したいという場合共にあるが，親の一方的な押しつけは稀で，必ず子供の意志が尊重される。婚姻のイニシアティブは男側から取られる。男が自分のオジ（wah）にあたるものに交渉を依頼する。とくに父方，母方は意識されず血縁のオバ（amoi）の配偶者もオジと同一視される。狭い意味のオジがない場合は，親のイトコに当るものがその任にあたる。同じオジでもなるべく女側にも発言権を有するようなオジが好まれる。この男側の代表者（wali）が娘の所に行き，娘側の wali に話をつけて，娘の親，娘自身の意向を問うわけである。この時に，結納についても決定される。

結納物，結納金は慣習によって各部落毎に決まっている。男が必ずそろえねばならないのは，指環，耳飾り，首飾り，シレ，ピナン，タバコ，衣服，髪すき，かみそり，鏡，口紅，白粉，髪油，であって，これらを1品ずつそろえるか（serba satu），2，3品（serba dua, serba tiga）ずつそろえるかは娘側の意向による。この品物に，2.5ドル（M$）ないしは2,30ドルまでの mas kawin が男側から女側に渡される。これらは娘の wali に渡されるわけであるが，結局はすべて娘の手に渡される。結納の式は，男側の wali が，娘側の wali にこの品物を渡して，その後でシレとピナンを食べ，タバコを吸って完了する。

結婚式は男側の準備が整うと，娘の家で行なわれる。式の中心となるのは，両者の水浴と bersanding と，共食とである。時と場合とによってこの後か前に，集った人々全部に食物を出す宴が行なわれる（bekerja）。この宴のための費用（belanja）は普通 100～200ドルで，男の責任で女側は1銭も出す必要はない。男自身で用意する場合，親縁のものが助けあう場合，広く部落の人から寄付によって集める場合などある。式の後はバイオリンをひいて一晩中踊りをしたり，かけごとをして過ごす。形式上はこの夜両者は一緒に寝るわけであるが，簡素な家の構造，まわりの雰囲気などのため beginan にまでは至らないことが多いようである。しかし，“pantang”として，この夜から3日3晩は，両者は必ず向いあって寝，朝起きると2人そろって水浴し，御飯は一つ皿のものを2人で一緒に食べねばならない。また3日ないしは1週間は部落の外に出ることは許されない。

式の翌朝，すなわち両者の間で事が成立したと仮定される晩の次の朝，両者の親族および部落の長である Batin が集って berhadat と称して，金の支払・分配がなされる。上述の mas kawin もあらためて勘定され，これに加えて“hadat”の金，“timbang”の金が男側から女側に支払われる。前者は20ドル，これは娘側の wali の間ですべて分配され，後者は40ドル，これは娘の属す部落の Batin に対する金で，その分配は彼の一存による。（但し金額は一定でない。）この berhadatの後，新郎新婦（pengantin）はそれぞれの親族の1人に手をとられて，相手側の親族1人1人に挨拶して回る。それから両方の親族一緒に食事をして，完全に結婚の手続は終る。結婚の届出などの法的な手続はなされない。

上述の手続は，しかしながら，オーソドックスなやり方であって，必ずしも結婚がこのような手続をふんでなされるとは限らない。両者の間で愛情が急速に進展して誰も知らないうちに性的交渉をもってしまうこともある。この場合は，娘側の wali が男を「捕えて」強制的に結婚させる。あるいは相思相愛で，娘の親が結婚に反対している場合など，男の方に勇気があれば，娘の家に忍びこんで一緒に寝て既成事実を作ってから，どうしても結婚させねばならぬようにしたりする。相思相愛の場合はこのようにいろいろ抜け道があって，男に十分の金がなくとも結婚はできるが，結婚の慣習法を破るわけであるから，罰金を課せられたり，婚後の生活において種々の規制を男が娘側の wali から受

けるのは当然である。

さらに容易なのは，娘が一度「手を濡らした」もの，即ち janda の場合で，多くは格別の手続を経ずに一緒になる。

それでも婚前の交渉は厳しく罰せられる。たとえば，DN 部落の男が JR 部落の女に，「エンダウの町で会った時結婚してもよいというあなたのことばであったが，その後何の返事もないのはどうしたことか。タバコ，白粉，口紅，ハンカチ等の品物を一緒に送るから，結婚するのか否か，すぐに返事の手紙を出してほしい」という手紙を送った。たまたま，この手紙が JR 部落の Batin の手に落ちた。そこで Batin は，部落に住むその男のオジを DN 部落に送って，その男ならびに DN 部落の Batin を呼んで，JR 部落で事件の裁判ということになった。

この時，女の方は上述のような約束をしたことを認めたにもかかわらず，Batin の法は厳しく，男がもし結婚したいのなら，法を破った罰やその他 Batin の timbang として結婚費用200ドルを用意せよ。もしこの金が調達できぬのなら，部落に対し迷惑を与えた罰金として50ドル差し出すことを命令。男側は費用として100 ドルしか用意していなかったため，結局50ドルの罰金を支払ってこの結婚は不成立に終ってしまった。この50ドルの半分は DN 部落の Batin に渡され，各々の金は関係者に分配されたという。この問題の女性は，先年，3カ月ほどの結婚生活の後，問題の男と一緒になるために先夫（父方第1イトコ）を捨てたというのである。

この Batin の判決に対しては，不満をもらすものが多かったが，公然とした反対はなされなかった。それはこの判決がいちおう慣習法に基いたものであるからだという。

婚後の居住は一時的に妻の家で過ごすのが慣習ではあるが，妻の家の大きさ，夫の経済力，妻の親がどの程度婿の経済力労働力を要求するか，などによって，遅かれ早かれ，独立の家を持つことになる。たとえ長く2世代の家族が一つ屋根に住むことがあっても，かまどは別々のものをもち，家計を別にするのが普通である。新居は必ずしも妻の部落とは限らず自由に選択し得る。

3

夫婦の間はきわめて平等であって，ことに家に関する事柄については，妻の意見が第1に問われねばならない。女の仕事は，水汲み，薪木集め，魚釣り，果実・野菜・タピオカ・とうもろこしの収穫，育児，家の内外の掃除，洗濯，パンダヌスのマット・バスケット作り，タバコの巻葉作り，男が切ってきたロタンの洗い仕事などで，後者の3つの仕事は，現金収入の道でもある。これに対して男は，ロタン切り，伐材，狩，家作り，網による魚取りなどの仕事をするわけである。ロタン切りの場合，奥地に入って長く仕事をする時は，必ず夫婦そろって仮小屋（pondok）に住んで，共同作業をする。部落の近くでロタンを切る場合は，単身か，または2，3人1組になって男だけで行く。この時狩も同時になされることが多い。このパーティは，近い血縁地縁関係にあるものからなり，常に一定した構成を示すことが多い。

また財産の分配も男女の区別なしに均等分割が行なわれる。名前もマレー／アラブ式のように個人名の後に父親の名をつけて呼ぶ慣習も伝統的にはない。政府のセンサス，身分証明書などでは便宜上マレー人式に，A bin (binte) B というふうに書かれてはいる。夫婦はお互いの名前を直接呼びあう。

結婚が簡単であるように離婚も，一方が嫌になれば，それ相当の罰金(Batin の場合25ドル)を支払えば事が済み，両者とも嫌になると，あっさり別れればよいわけである。離婚したものに対する社会的な冷い眼も存在せず，人々は離婚をごく軽く受けとる。再婚に際しても特にハンディキャップというものは考えられない。

このように夫婦の間柄は平等であって，時には uxorifocal な点をも感じさせるほどである。

乳児の養育に関しては，児に非常に甘く，こどもが泣けば乳を与え，こどもの思う通りに行動させ，排泄もまったく放任される。こどもに対して肉体的な罰をほどこすことはきわめて稀で，多くは説得・叱責・威嚇による教育がほどこされるだけである。6～8才位に

なると，何らかの仕事を手伝うことを期待され，いろいろな雑用の他に，女子は母親に男子は父親に従ってそれぞれの仕事を覚えてゆく。女子はこの時も男子より早く定期的な仕事を課せられる。弟妹の子守りとロタン洗いである。最初は子供の意志を尊重して仕事も連続的ではないが，10才をこえると，徐々に責任のある仕事を課せられる。その仕事を責任をもって果し得，1人前の人間と同程度の結果を得られるようになると，dara として認められる。dara となって真剣に結婚を考えだすと，自分自身の資金を親とは別に貯える例が多い。一緒に住みながら計算は完全に別という個人主義的な家族もある。dara の婚姻年令が遅れれば遅れるほどこの傾向は助長され自然と dara が独立していく。

こどもに対する愛情は父母ともに強く，養子の場合でも実子とかわりなく愛情をそそぐ。こどもも親に依頼心と信頼心とを強くもつ。しかし親がこどもに老後の世話をみてくれることを期待するのは少なく，いくら年をとっても（男女とも）働きを止めてこどもの世話になるという例は知らない。

マレー人のように，こどもの長幼を特に指示することばはなく，きょうだいは性別に関係なく，年上のものは bah, 年下のものは adek と呼ばれる。adek が bah を呼びかけるときには，名前を用いるのに対し，bah が adek を呼ぶ時には，単に adek と呼ぶだけである。bah は常に adek の保護者として振舞うことを期待され，たとえ adek が自分ひとりで沢山の菓子を持っていても，それを取り上げるということはなく，adek の方から差し出してくれるのを待っている。きょうだいの間では，自分だけが獲得したものを分配する傾向はことに強い。

4

新しい夫婦家族が形成されると，姻族関係が生じる。夫婦間の調整と共に，この姻族関係の調整が新夫婦に課せられるわけである。この新しい関係の conflicts を避ける意味で，関係者の間に，遠慮ないしは尊敬の態度が要求される。

配偶者の親は mentuha, こどもの配偶者は menantu と呼ばれ，両者とも名前を直接言うことは忌避される。mentuha は単に配偶者の実際の両親だけではなく，wah (＝pak saudara), amoi (＝mak saudara) にまで拡大され，同様のことは逆の場合にもいえる。mentuha-menantu 間に厳しい忌避関係はない。夫婦の両親間の関係は bisan と称されるが，特別な態度を要求されることはない。

配偶者のきょうだいは，ipar と称呼され，この ipar の名前も忌避される。mentuha-menantu 間同様，一般に使用される第2人称 hi を用いず，尊敬の意味のこもった aji が使われる。ipar の配偶者は biras と称されるが，biras 間にも特別の規制はない。ipar 関係も拡大解釈され，配偶者の血縁のイトコもすべて ipar とされる。

部落は，きょうだい・いとこ・親子・おじ・おい関係によって結ばれた夫婦家族の幾組かが中核となって形成される。来たるものはすべて受け入れるという open な社会なので，全然関係のないものでも部落に住めるわけであるが，夫婦とも部落内に1人の関係者もないという例はない。必ず夫婦の一方のきょうだい，いとこ，親，子，おじ(おば)，おい(めい)のいずれかが住んでいる。

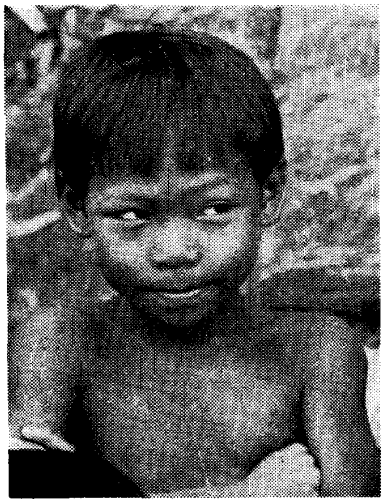
そして，このエンダウ川流域の，LB, DN, MT, JR, TT, PN, PT の各部落の人間は，すべて adek-beradek であると彼らは意識し，他の川に住むオランフルとは一線を引く。しかしこのグループが内婚集団を形成することはなく，自由に他の川に住む部落の者とも通婚するので，個々の夫婦家族はエンダウ川以外にも広く縁者を有している。例えば，カハン，スンブロン川に住むオランフルは特に JR, TT 部落の人と近い関係にあるものが多く，また MT, DN, LB は，アナ・エンダウ川の部落のものと近い。

部落は別にしても，一つの川に住んでいるということは，彼らにとって大きな意味をもち，川を違えることは社会を違えることに等しいほどである。しかし，同じ一つの川に住むものでも，部落毎の競争意識，ライバル意識は強く，部落を訪問すると必ず他の部落の悪口を聞かされるのが常である。いわく，家の配置がなっとらん，敷地が汚い，蚊が多い，Batin の身持ちが悪い，女がだらしない，金のためなら何でもする，等等。

実際に各部落の相違も見逃し難く，話し方，イントネーションを若干異にし，生活の仕方にも差異がある。

もっともエンダウの町に近いLB部落では，上流の諸部落とははなはだ異なるイントネーションがあって，この部落だけは親族称呼も若干ことなる。LBからごく近くのDN部落の人は，半分はLBのイントネーションで話しその親族称呼を用いる。ここでは中国人の材木業者のkongsiに働く中国人労働者，マレー人労働者，および定着したマレー人家族が住んでいて，他の部落には見られないことである。MT部落はDNと共にパハン州側にあって，ここにJabatan Orang Asliのパハン州の役人が出張しており，学校，診療所が整備されて，各々マレー人の先生，K. L. から来たdresserが住んでいる。そのせいか，部落から受ける感じは，去勢された部落というところである。奥地のPTは新部落を作ってから5年ほどになるが，きちっとした家の配置，すべて同一の材料を使ったゆったりとした清潔な家，部落の集会所であるbalai，戸口にある魔よけの飾り，木器を使ってする伝統的な音楽などを有することで，他の部落とは別な感じを受ける。

各部落は，各々有能と認められた人間が，Batinに選ばれて，彼によって部落の在り方が決定されるわけであるが，彼の下にも，上にも役職を持つ者は存在しない。一つの川を結ぶ連盟のようなものも現在はない。すべての事件はBatinによって裁決されるわけであるが，その裁決が独断に走ると，Batinの地位を追われたり，部落の者が他部落に移住していってしまうので，Batinは常に部落のものの意見をとり入れ，妥当な裁決をすることを強制される。



5

以上，フィールド・ノートから若干の事実を列挙してみた。家族・親族問題の予備知識となるものを提供したかったのであるが，問題を直截に指摘するまでには至らなかった。

調査は8月から始まり，約1カ月間，都合により不在であった以外は，ずっとJR部落に滞在し，この部落の人々と共に生活することによって資料を集めた。

調査の上での障害は何といっても言語であろう。彼らは程度の差はあってもマレー語を話す。(例えばDN部落の多くのものは，ほとんど完全なイントネーションでジョホール・マレー語を話すことができるのに対し，JR部落の者の多くはイントネーションが奇妙である。) 彼らのことばが，マレー語の一方言である以上，マレー語を話すのは不思議でもなくそんなに困難でもないのであるが，マレー語との相違は単にイントネーションのみではなく，語い，語順においてもしばしば異なり，彼らが普通に話すとマレー人は理解できないほどである。

同じジャクン（オランフル）と称されるグループの中でも，きわめて地域的差異が大きく彼ら自身他の地域に行くとマレー語で用を足す有様である。

私は達者なマレー語を操る自信もないので，最初から彼らの方言に取りくんでいったわけである。しかし数カ月の滞在で，やっと慣れてきたという程度である。このようなことばの問題もあって，前半はobservationと，こちらからの誘導ではなく相手のしゃべるにまかせた会話とから情報を得ることに努めた。

その他，彼らの受け入れ方，調査に対する態度，質問に対する答え方などいろいろの困難があるが，ともかく，19世紀にソマリ族の調査をした学者が，「無知な原住民はマラリアが蚊にかまれて生じると信じている」と書いたような誤りだけはしたくないと思い，できるだけ彼らの思考の仕方をそのままこちらが受け入れるよう努力している。

残された期間は，前半がpassiveな調査とでも名づけられるのに対し，activeな調査を目標とし，積極的なインタビューを試みたい。すでに12月にインタビュー票を作製したので，これによって各夫婦家族毎にインタビューを行なって，ある程度の統計を得たい。これは統計を得るのが目的ではなく，数字に示された結果と彼ら自身の意識的な考え方との相違が見たいからである。

（1966月2月）

タマサート大学日本研究講座

桂　　満希郎

1　日本研究講座について

昨年1965年11月よりタイ国タマサート大学教養学部に，日本研究講座なるものが設置されることとなった。私は1964年6月よりチュラロンコン大学文学部に留学中であったが，これを中途で打ち切り，同講座の日本語インストラクターとして新しく仕事を始めることになった。この講座は，日本の外務省文化事業部よりタマサート大学に寄付され，河部利夫教授（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）をヘッドとし，それに私と木村宗吉氏（慶応大学）との2名の助手が加わり，合計3名の日本人により構成されるものである。こちらの大学では，6月から10月までを前期，11月から3月までを後期とし，1年を2期に分けている。したがって，この日本研究講座は1965年度の後期より正式に発足したわけである。なお，ここでいう「教養学部」というのは，“Faculty of Liberal Arts”と英訳されているが，日本でいう2年間の教養課程というのとは全然別のものであって，法学部や経済学部などの学部と同列に並ぶ1つの学部の名前である。

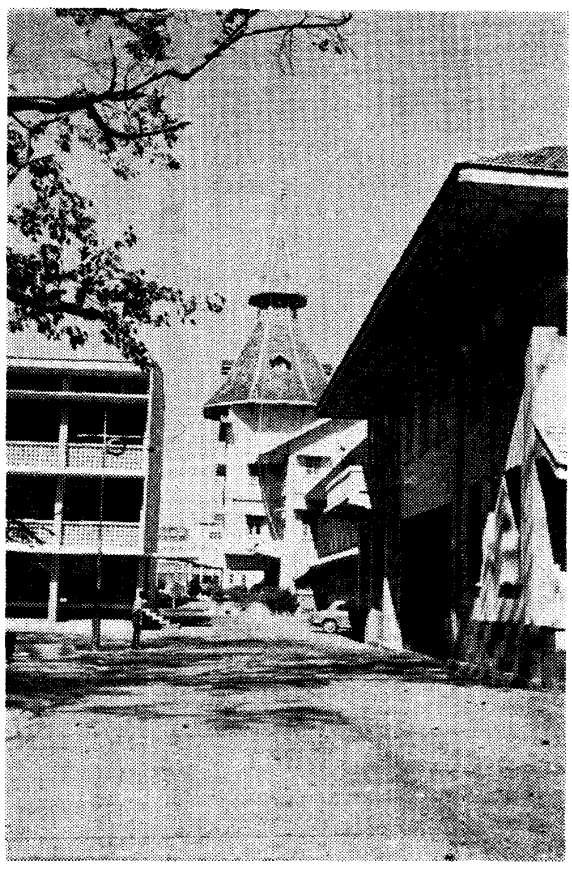


写真1　タマサート大学教養学部構内

タマサート大学は，その名前の示す通り，元来は法律を専門とする大学であったが，それに他の学部が徐々に追加されて，現在では総合大学としての形を次第にととのえつつあるといってよいだろう。同大学の学部を設置順に記すると，法学部，商学経営学部，政治学部，経済学部，社会学部，行政学部，教養学部の7学部で，最後の教養学部は1962年に設置されたものであり，数学科，統計学科，文学科，心理学科の7つの科を有し，毎年の入学定員数は150名である。なお，全学の入学定員数は約2,000名ということになっている。日本研究講座は，この教養学部の言語学科に設けられたものである。どの学科にも共通していえることは，語学に力を入れているという点であり，各学科とも全学年を通じて英語とタイ語とを必須としている。言語学科においては，2年以上は，更に日本語，中国語，フランス語，ドイツ語のうち1つを選択することになっている。これら4つの言語は，言語学科の学生のみならず，他の学科の学生も聴講できる仕組になっているので，どの学科の学生も語学は一生懸命やっているようである。ただ，「言語学科」といっても，言語学の discipline はかなりとぼしく，どちらかといえば実際的な語学が主になっており，「語学科」とでも呼んだ方がより適切かも知れない。

タイ国では，少なくともバンコックにおいては，日本語を習いたいというものは非常に多い。この日本研究講座の他に，私立の職業学校，日本留学生会，個人塾のようなものまで含めると，現在日本語を教えている所はかなりの数にのぼると見てよいだろう。日本語を習いたいという理由には，日本の会社に就職したいからというのから，将来は日本に留学して自分の専門の研究を進めたいからというのまで色々あるようだが，とにかく日本語あるいは日本を知りたいという気持はかなり強いと見てまちがいないだろう。そのなかで，この日本研究講座は，単に日本語を使うという技術だけにとどまらず，言語をも含めて日本の文化，社会等を

理解してもらうことを目的とするもので，「日本語講座」ではなくて「日本研究講座」と名づけられたのも，こういった理由によるものである。タイ国における1つのモデルケースとでもいうべきもので，今後この講座によせられる期待が大きいだけに，私達の責任も重大といわねばならない。また，将来においては，ただ日本政府が日本人を送ってよこすというだけでなくて，タイ人のすぐれた日本研究者を養成し，タイ人の研究者にこの講座の主導権をうつそうという計画である。

2　授業について

11月の授業開始前には，果してどれだけの学生が出席を希望するかと思われたが，実際に開講してみると，私が予想していたよりは多いことがわかった。学部長の Adul 博士によると，フランス語，ドイツ語の選択希望者よりも日本語選択を希望する学生の方が多いくらいだとのことである。この講座が設置されるまでの間は，大使館，Japanese Information Service，留学生の人達の手によって日本語が教えられており，2年と4年との2学年があったが，本講座が正式に設置されるに当って，3年生から新たに希望者をつのり，1クラスを構成するに至ったのである。2年と4年とは言語学科の学生よりなるが，3年は上に述べたような事情で，歴史学，心理学等の他学科からの聴講者よりなる各学年の男女別人数を示すと表1の通りである。

表1　各学年の人数

	専　攻	男　子	女　子	合　計
2 年	言　語	1	6	7
3 年	心理・歴史	7	14	21
4 年	言　語	1	7	8

女子学生の多いことは，チュラロンコン文学部ほどではないにしても，この国のどの大学についても多かれ少なかれいえることである。また，3年は他学科からの聴講より成るため，単位に関係しないためか，人数が不同で一時は30名を越えることもあったが，現在では10数名となっている。しかし，一定期間をすぎると人数も定まって来て，それらの学生に関する限りは，言語専攻の学生と同じ程度に熱心だといえる。言語学科の学生にしても，必ずしも全員が日本語という言語そのものを研究しようという者ばかりではなく，日本に関する他の分野の研究を進めるための手段としての日本語を身につけようという学生が主となっている。全学年を通じての合計人数が36人で，数自体はたいしたものでもないが，フランス語やドイツ語を選択する学生の数から見て，これはかなり大きな割合を占めるといってまちがいないだろう。

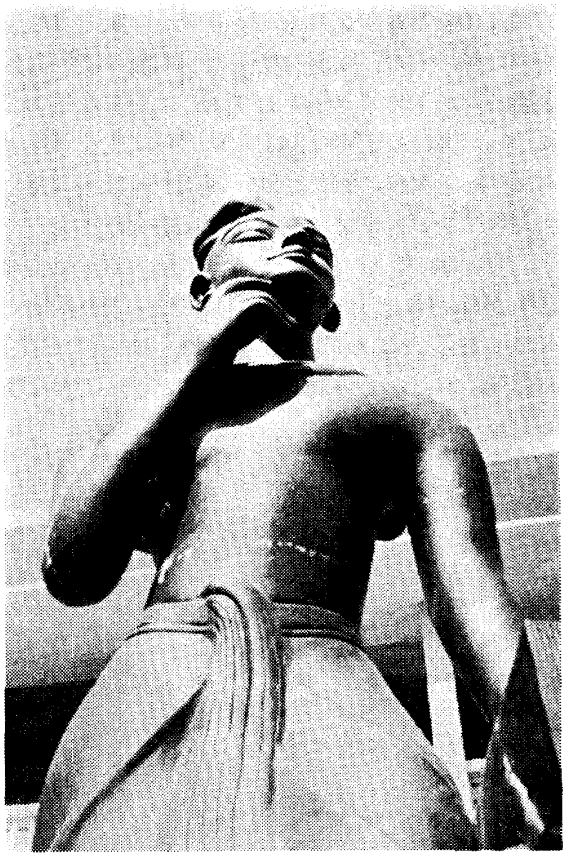


写真2　古いタイ国の伝統的な学生の像

授業時間数は全学年とも1週間に6時間となっていて，そのうちの2時間がランゲジ・ラボラトリに当てられている。なお，1時限は50分であり，日本の大学のそれと較べて短かい様に思われるが，言語の学習にはこの方がより能率的だと私は思う。全学年を通じての授業時間数の合計は1週18時間となるが，これらはすべて日本語の授業であって，これとは別に歴史学科との共通講義として，河部教授が「極東アジア現代史(1914年以降)」を担当されており，これが1週3時間である。各人の受け持ち時間を示すと表2の様になる。

表2　講義担当時間数

		2年	3年	4年	計	備　考
単位取得人員		7	21	8	36	
担当時間数	河　部	0	1	1	2（歴史3）	日本語，日本文化
	木　村	3	2	3	8	文字，読み方
	桂	3	3	2	8	音声，文法
	計	6	6	6	18（歴史3）	

この表でわかる様に，担当者が3名，学年が3学年となっているので，各人が1学年を受け持ちということにしてもよいわけであるが，少なくとも現段階ではすべての担当者に全学年が当るようになっている。最初の段階から1人の担当者が全責任を持って徐々に段階を追って教えて行く方がよいか，現在の方法が良いかは問題であろう。私は前者の方がより良い様な気がする。教える側からすればたがいに連絡を取ったうえで教えているつもりでも，習う方にしてみれば，3人が入れ変り立ち変り別の教科書で多少とも異った話をするのでは，実際問題として，どうしても混乱の感をまぬがれないのではないかと思う。少なくとも，今まで日本語を全然知らなかったものに最初から教える際にはこのことがいえると思う。ただし，これは日本語の授業に関してのみ言えることであろう。

授業の内容としては，別にこれといって変ったところはない。日本における英語なりフランス語なりの授業を日本語に置きかえたら似た様なものになるだろう。現在使用している教科書は――もともと極めてとぼしいが――国際学友会日本語学校の「よみかた」，「日本語読本1」，「NIHONGO NO HANASIKATA」および，大学書林の「日本語4週間」である。言葉を学習する順序からいえば，まず話す練習から始めて，徐々に文字を導入して行くのが本道であろうが，本講座では最初から文字（ひらがな）を教えて，授業はすべてひらがなを使用して進めて行き，後にかたかな及び漢字を入れて行くことにしている。これは，時間数が不足なうえに，教室から一歩出れば日本語を聞いたり見たりすることはほとんど皆無という環境を考えれば，文字を使用することによって，学習したことを固定させるようにつとめた方がより効果的だと思われるからである。ただ，話すことから始めるにしても，最初から文字を教えるにしても，反復練習ということは非常に大切だと思う。例えば，2年の場合，「よみかた」程度なら理解できるわけだが，その理解の仕方が，単語を一つ一つタイ訳し，それをもう1度つづり合わせてようやく意味が解るといったやり方で，1度自分の言語に訳すことなしに一つの文章を全体として把握する訓練がかけている。このためには，色々なパタンの文について練習を重ねることによって，自動的に理解する習慣を身につけるより仕方がないと思われる。各学年に週2時間割り当てられたラボラトリの時間は，わずかな発音練習を行うだけで，残りの時間は日本に関するスライドを見せたり，通常の授業を行なったりすることにしている。ラボラトリを使用するには，資料を収集・整理し，完璧な準備をととのえたうえでなければ効果をあげることができない。今年は，留学打ち切り後に1度国を出て，授業開始前わずか10日ばかりの時に帰国したため，準備をととのえる余裕がなかった。このためには，教える方の者が行ったり来たりしていてはだめで，長期間にわたって腰を落ちつけ，年がら年中授業の準備をしなければならないと思う。

今年度は11月の後期から始めたために，あとわずか1カ月半くらいしか残っておらず，準備期間の方も不足していたが，来年度の新学期からは，まず年間の授業時間数を計算し，それにもとづいて年間計画を立て，それだけはどんなことがあってもたたき込むようにしなければならないと思う。こちらは1週5日制であるうえに，何だかんだといって休みの多いところであるから，その時になって不意に休日であることに気づく様な事のないようあらかじめ計算に入れておかなければならないと思う。何かの都合で授業がぬけた様な場合には，夏休みにくい込んでも補講するくらいの必要があると思う。また，ランゲジ・ラボラトリーは，教える方に充分な準備ができていないとむしろ非能率的で，普通の授業を行った方がましだというようなことになるので，来年度もこれを使用するとなると，授業開始前の数カ月を資料の作製，テープの準備などに費やす必要があるだろう。このラボラトリーの年間計画を立てて，これを教室における授業とうまく平行させて進めるようにしなければ，充分な効果を上げることはできないだろう。ただ教科書をテープに吹き込んだというだけでは仕方がないと思う。このラボラトリーの準備は一大仕事である。

この3月10日から試験が始まり，採点・成績表の作成などを終えると少なくとも3月末日になるだろう。それから私は一時出国しなければならないことになっているが，出来るだけ早く帰って来て，来年度の授業にそなえ，年間計画の作成，ラボラトリーの準備，教材の整備などに残る2カ月余りをフルに費やさなければならない。また，時間割決定や教室の割り当てなどの際には，必ずその場に出席して，他の者に取られてこちらが不便な目に会う様なことのない様にしなければならない。先にもふれた教科書やそれにともなう資料の作成となると，これは数カ月でかたずくものではないが，現在のところ，少なくとも年間のカリキュラムを立てて，それにしたがって授業を進めるようにしなければならないと思う。今のところ，まず私に与えられた期間を利用して，日本語とタイ語との研究，両言語の対照を進めることを主な目的としている。

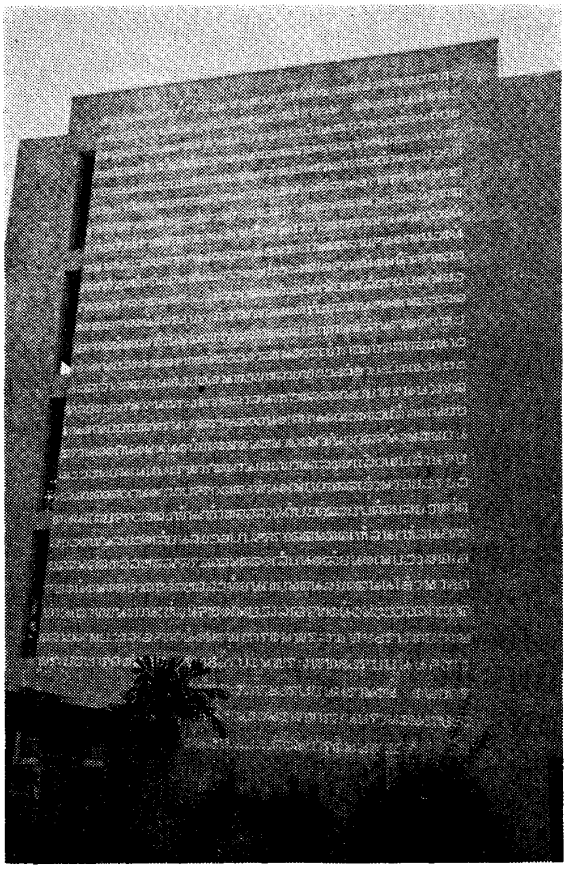


写真3　教養学部の壁にほられた Ram Khamhaeng 王の碑文

2つの言語を比較する場合，まず音声の面から始めるのが普通であり，またこれが最も手につけやすいものである。だから，さし当っては，タイ語と日本語との音素体系を対照し，どの点がタイ人にとって問題となるかを見きわめる必要がある。これをもとにして練習用の教材を作成し，ラボラトリーの時間数を計算し，1年間の計画を立てたいと思っている。それより更に進んで，シンタックスに入ると，そう簡単には行かなくなる。これには相当な期間を費やす必要があるだろう。とりあえず来年度の授業開始までに，日本語とタイ語との音素体系の対照を行い，これにもとづいてラボラトリー用の教材を作成することを，この2カ月の休暇の目標としている。音声などは大して重要ではなく，読むことこそ大切なのだとする意見もあるが，私は音声と読解力とはそう簡単に分離できるものではないと思う。最初に日本語の音声習慣をしっかり身につけておかないと，後に読む練習，書く練習あるいは話す練習をやっても，能率が上がらないのではないかと思う。読むことが大切であれば，さればこそ音声の面から徹底して行わなければならないと考えている。

3　後　　記

私が，この日本研究講座の仕事を始めるに当って，外務省，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，京都大学東南アジア研究センターに，大変お世話になり深く感謝する旨を記しておきたい。また，この原稿を書くに当り，「タマサート報告」第1号および第2号を参照した旨記しておく。

（1966年1月30日バンコックにて）

タイ植物調査の旅から

岩　槻　邦　男

バンコックを離れた翌日，私達のバスは，東北の街クオンケンから北西に向けて，広い原野をまっしぐらに走っていった。トラックの荷台に座席と屋根をとりつけただけのその乗合自動車は，満載の客と荷物を積みこんで，70キロから90キロの速度で突っ走る。舗装のない道路は細かい砂埃を巻きあげ，私達の白いシャツはみるみるうちに赤褐色に変ってしまった。車は揺れ，路傍の草はぐんぐん後方へ飛んではいくが，街という程家屋の集ったところもなければ，景色もいっこうに変わらない。乾き切った原野には陽光がいっぱいに降り注いでいるだけで，その上を赤褐色の道路がどこまでも続いていく。

ここでは，山も平原も，一切のものの造りが大ざっぱである。乾期と雨期の差があるとはいっても，東北部や北部では雨期に降る雨の量もしれている。その乾いた原野には，北から南まで同じ種類の雑草が続いている。四季のうつり変わりがはっきりしていて，山あり峡谷ありと地形の変化が激しい日本では，植物の種類も多く，多様な景観を示す自然が，この国の原野では単調にひろがっていく。しかし，その原野を突き切って，一度山地に足を踏み込むと，原始の姿を留めた森林の美しさはまた格別である。

旅の最初には，国立公園のプー・クラディンに登った。海抜1,200メートル位の高さのところが45平方キロに亘って平原になっている。その平原は堅い岩板の上にミズゴケが堆積して，一部は高層湿原のようになっており，松林の間には，昆虫を捕って育つウツボカズラやイシモチソウの仲間が沢山生えている。11月下旬は乾期に入って間もない時，日本の秋さながらに，キクやマメの仲間の花が咲き競う平原の彼方に，夕陽は鮮やかな雲の色を残しておちていった。

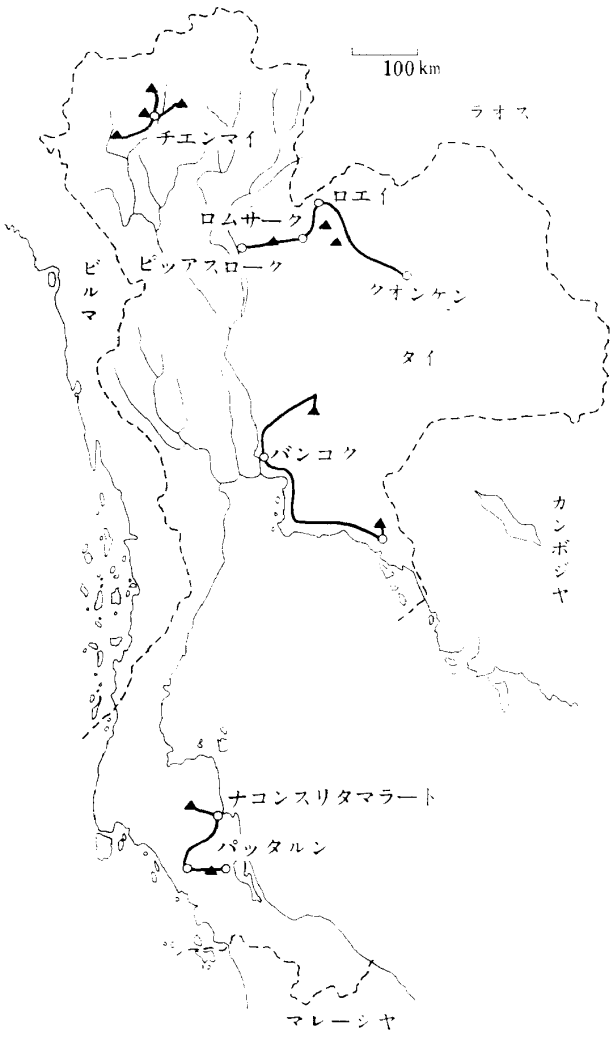


写真1　ウツボカズラ　食虫植物の一種で，プー・クラディンで撮ったもの。この山の湿地には，イシモチソウやタヌキモ，モウセンゴケなど，食虫植物が多かった。

理学部の田川基二助教授をリーダーに，北川尚史（奈良学大講師）・福岡誠行（理・大学院）・岩槻邦男（理・助手）の一行4人は，11月上旬に日本を出発してこの国へ入り，シダやコケを手始めに，この国の植物相を調査すべく，これまでに，東北部・北部・半島部を歩き，更に東南部や中部のカオ・ヤイなども調べようとしているところである。タイ国森林局の好意ある援助を受け，非常に恵まれた旅を続けているのではあるが，何分開発が遅れているこの国のこととて，辺ぴな田舎ではいろんな困難に行き当ることもある。

プー・ルアンへ登った時など，幹線道路を離れて山麓の部落まで，21キロ進むのに6時間余を費した。トラックに積み上げた荷物の上に乗っかった私達は，棘の多い木の枝に何回か帽子を釣り上げられたり，川を横切る時は危険を避けて徒渉したりせねばならなかった。その間，道らしい道はなく，車は時々刈り入れの終った田圃へ乗り込んだり，橋など全然見当らない川に行きあう度毎に，ザブザブと腹迄浸ってそれを横切ったりせねばならなかった。幾つかの深い川では車がスリップして動けなくなってしまい，木をきって来て車の下に敷くやら，綱で引っ張るやら，いろいろと面倒なことだった。

定まった登山路などない山を，野生の象が歩いて周囲の灌木を押し拡げたチャン・タン（象の小径）を通り抜けて，プー・ルアンの稜線を私達は歩いていった。2，3の山を除いて，この国の山には径など無い。南部のカオ・ルアンでは，密に茂った熱帯降雨林を，屈強のポーター達が山刀で切り拓いてくれるその隙間を，私達はゆっくりと登っていった。そんなわけで，行動予定が狂ってしまうことも度々あって，ずい分下の方から水を担ぎ上げたこともあったし，とうとう食事もできずに露営を強いられるようなことも，一度ならずあったりした。

プー・ルアンからの帰り道，私達のトラックは私達の収穫物の上に唐辛子の袋を積めるだけ積み込んで，私達はその上に不安定な席を設けねばならなかった。年に一度入って来るか来ないかという自動車は，麓の村ではたいした人気で，私達が村に着いた夜は，村長さんの家の庭は村人でいっぱいになった位だった。帰る時も，何人かの少年達は，何とかして一度車に乗せてもらいたいものと，必死になって追って来た。危いから止せ，という同乗の森林局の人達の制止の声も，彼らの願望の強さには打ち克てず，遂に私達の方が根負けして乗せることになった少年は，起伏の多い山道を4キロばかりも追い続けてきた。将来はアベベより強くなるかもしれませんね，と森林局の人達と話し合ったりした位だった。

車さえ入って来ないその土地の人々は，それは素朴な感情で私達に接してくれる。おりから稲の刈り入れ時で，プー・ルアンに登った時には私達はポーターを8人しか雇い入れることができなかったが，彼らは重過ぎる荷物を担いで，それはよく働いてくれた。商品が流れ込んでくることも少ないこの地方では，村人達に経済観念が発達せず，原始のままの自給精神がうけ継がれているという。だから，日当を値上げしようという言葉は彼らにはそれ程の励ましにならず，手持の煙草1本，飴1個の方が，余程活気を与えるといった有様である。

写真2　ココヤシは熱帯降雨林の枝に結びつけて発芽させてから地に下ろす。カオ・ルアン山麓で。

タイ国の山はそれ程高くはなくて，最高峯のドイ・インタノンでも僅か2,595メートルに過ぎないが，広大な北部の山地のほとんどは，深い緑に包まれて美しい。ところどころ山地民に焼き払われて緑の褪せてしまったところを指し示して，私達の全行程に同行して下さっている森林局のダムロン

さんが，今政府の事業としてあの部分の緑化を計っている，とまるでそれだけ禿げている部分のあるのを恥じるかのように話されるのを聞きながら，私達は，緑が薄くなってしまった日本の山の姿を想い出したりしたことだった。

北部の山地は北へ向けてずっと連なるが，この付近で中国の雲南などにある種類を幾つか見付けた私達は，国境の向うのビルマに蜿蜒と連なる山地を望見して，あの北を調査することができたら，分からないままに打ち棄てられていることがどんなによく分かってくることだろうと，ほとんど涎を流さんばかりだった。

写真3　辺ぴな村へ入れば，老若男女を問わず村人が集ってくる。写真はカオ・ルアン山麓のワット・キリ・ワンで。

幾つかの幹線道路を別にすると，地方の道路は甚だ悪く，常に沢山の仕事道具を持ち歩く私達の移動は難渋を極める。或る時は私達の乗っていた小型トラックが横転して肝を冷やしたことがあったし，また或る時は，数日前に開通したという乗合自動車を利用したら，これは完全なトラックで，荷台に落花生と豚を満載したその上にお客が乗り合わせるものだった，というようなこともあった。慣れない土地のことだけに，予想外の困難に直面することもあるけれども，重いばかりにコケをつけた蘚苔林に入り，蔓と蔓の多い密林を通り抜けて仕事をする時には，その美しさと珍らしさに私達は恍惚としてしまう。専門の植物の収穫も大きく，未記録のものの発見も相当な数に達する。

丁度私達と時を同じうして，オランダとデンマークから植物調査の人達がタイ国にやってきていて，それがそれぞれこの国の森林局のお世話になって動いているのであるが，収穫の大きさでは私達のものが断然第一番で，私達に同行して下さっているダムロンさんは他の人達の手前，ずい分良い気持のようだった。

しかし，そのオランダ・チームとドイ・インタノンなどで，デンマーク・チームとカオ・ルアンで，それぞれ逢ってみて，私達はいろいろと考え込むことが多かった。植物調査では相当の歴史を持つ北欧の国々は，装備は私達のものより遙かによく，それでいて，無理のないようにゆっくりと仕事をしていた。調査に来ている間に，できるだけ沢山歩いて，できるだけ稼ぎを貯えようというような考え方は，どうやら日本人だけのもののようである。また，デンマーク・チームのザイデンファーデン氏は元外交官，駐タイ大使もやった人で，森林局腊葉館主任のテム氏とは以前から共同でランの野生種の日録を準備したりしている人であるが，こういう人の存在は，その国の文化のレベルを示す良い標準にもなるように思われる。

それはさておき，私達の僅々100カ日の山廻りはこの広大な国土のほんの一部をさぐったものに過ぎない。しかも，それだけでも，ほとんど未知であったタイ国植物相がうんとよく分かるようになったし，今後東南アジアの植物を研究していく上での基礎的な資料集めという意味でも有意義なものだった。何分広大な面積を擁するこの国のことであるから，まだその植物相の探究も緒口についたばかりではあるが，これを契機に，今後いろんな方法でこの国の植物がより詳細に調べられるようであってほしいと念じている。